

Fate/embers

ロッキード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

火の無い灰と呼ばれる騎士の女。

聖杯戦争でセイバーとして戦うことに。

彼女は己の使命を遂げるために、士郎と共に聖杯戦争で勝利を目指す。

第1話 残り火

目次

1

第1話 残り火

召喚されたその女騎士は体に火の粉が舞う。

華麗な見た目に反して、大きな剣を持ち、盾を持つその姿はまさに騎士であった。

「1つ尋ねる。貴公が私のマスターとやらか。」

士郎は呆気にとられている。

無理もない、目の前で様々な事が起きすぎたのだ。

「まあ、返答は後で聞こう。まずは目の前の敵が先だ。」

目の前の青い槍の男は少し驚いた様子で言う。

「サーヴァントだと…？そうか、マスターになったって事か。」

そう言い、槍を構える。その顔はやる気に満ちた顔にも見えた。

男が槍で鋭い攻撃を何度もする。

それを盾で何度も防ぐ。しかし完全に防いでいる訳では無く、若干傷を負っている。

「どうした！防いでばかりじゃ倒せないぞ！」

そう叫ぶ槍の男。

そして鋭い一突きを入れようとする。

そのとき、女騎士は盾でその槍をタイミング良く弾く。

しかも慣れたようにしてみせた。

「何っ……!?!」

女騎士は一撃を喰らわせようとしたが、もう少しのところで躲かされてしまった。

「おい、お前どこの英霊だ。戦い慣れたその戦い方。並のもんじゃねえな。」

女騎士はフツ笑うとこう言う。

「私はただの騎士だ。飛びつきり弱い方のな。」

その言葉を槍の男は煽りと受け取ったようだった。

大きな声で槍の男は言う。

「戯け！テメエみたいな「ただの騎士」が居るものか。なら、これを喰らうといい！」

槍に何やら力が込められていく。

そして言う。

「ゲイ・ボルグ!!」

女騎士はまた弾こうとした。

しかし、弾いたはずが既に胸元まで来ていた。

そしてその槍に刺され、倒れる。

そのまま、まるで灰が散るように消える。

槍の男は少し失望したようにしている。

「つたく、殺すなど言われたんだがな。仕方ねえ。

もうボウズには要はねエ。」

槍の男はそう言い、立ち去っていく。

その後だった。

先程、死んだはずの女騎士が召喚された蔵から出てくる。

「お前はさつき死んだんじゃ……」

士郎は驚きながら言う。

先程死んだはずの者が目の前にいるのだ。

「ああ、私はさつき死んだんだろうな。でも私は死ぬことはない」

士郎は困惑しながら質問をする。

「どういうことなんだ……?」

「私は簡単に言えば不死人。不死身という訳さ。」

私は火の無い灰。不死人だ。

例えばどんな方法で殺られようと、死ぬことは無い。

何度でも蘇るのだ。

だが、ここで「暗い魂(ダークソウル)」の説明をすると、ややこしくなる。だからここではしないことにした。

「…また来客のようだ。しかもマスターとサーヴァントが来るのか。」

士郎は女騎士は何やら地面の方をチラリと見たのを見る。だが、特に疑問には思うことはなかった。

「貴公はなんと言う。私はセイバーと呼ぶといい。」

「士郎…、衛宮士郎だ。」

そして、サーヴァントが来るであろう所まで行く。

士郎に止められるが、そんな訳にはいかない為、直ぐに向かう。
今宵は暗月の夜であった。